

平成22年度「心に響く人生の達人セミナー」講演内容

実施日：平成22年11月17日（水） 13:30～15:30

講演者：田辺 誠 氏（ピアニスト）

演 題：「音楽に支えられて」

場 所：長崎県立清峰高等学校 体育館

講演内容

私は、ピアニストとして色々なところで演奏をしていますが、これまでに、たくさんの壁にぶつかりました。しかし、多くの素晴らしい人との出会いがあって、その壁を乗り越えることができました。今日はその時のことを、特に皆さんと同じぐらいの時に体験したことをお話します。

私は、今から46年前、五島列島の宇久島で生まれました。私が幼少の頃の宇久島は、今のように塾やピアノ教室がありませんでしたが、オルガン教室は開かれていました。私の母が、そのオルガン教室のお世話をしていましたので、私もすぐ習い始めましたが、簡単な音階すらなかなか覚えることができず、すぐにやめてしまいました。この頃の私には、他にたくさんの夢がありました。バレーボールの選手になってオリンピックに出たいと思ってみたり、大好きな歌手にあこがれて、自分もテレビに出るようなスターになりたいと思い、毎日のように歌の練習をしていました。今、振り返ってみると、いろんなことに夢中になった少年時代だったなと思います。



しかし、この楽しい時間は長くは続きませんでした。小学校6年生の時に、背骨が横に曲がる重度の「脊柱側湾症」であることがわかり、諫早の病院に約2年間入院することになりました。今も私の体は、背骨が横に大きく60度曲がっていますが、50度以上になると、普通の生活も大変になってきますので、手術をする人も多くいると聞いています。当時6年生（12歳）という年齢で、両親と2年間も離れて暮らさなければならないということは、この時の私にはとてもつらくて悲しいことでした。そして、いよいよ宇久島を離れる日に感じたこと——港に入ってくる船の汽笛の音や大村湾に沈んでいく夕日の色など、その日に感じたすべてのことが今でも心に残っています。

そして、病院に着いてからは、驚くことばかりでした。今までに見たことも想像したこともないような病気を持った子どもがたくさんいたからです。右腕も左腕もなく、足の指でスプーンをはさんで食事をしていた子ども、頭に重い障害があって一人では何もできない子ども、誰かが助けてあげなければ生活していけない子どもがたくさんいて、私はとてもショックを受けました。また、当時はこの病院の決まりがとても厳しくて、約3ヶ月間は両親と電話も手紙も会うことも許されていませんでしたので、夜になると寂しくて、枕が涙で濡れるほど泣いていました。私の

両親も、どうしても私に会いたくなくなって諫早まで行き、いつ外に出てくるかわからない私を、病院の運動場の片隅で隠れて待っていたこともあったそうです。このような病院での生活が始まり、私が思っていたことは、「私は、この子どもたちとは違うんだ。一日も早くここから帰らせてもらおう」——これが、私のこの時の本当の気持ちでした。

しかし、私はこの病院で素晴らしい体験をしていきます。ある日、病院付属の養護学校の音楽の授業で、先生からショパンの「ピアノ協奏曲第1番」を聴かせてもらいました。この時、「音楽ってこんなに凄かったんだ。素晴らしいんだ」と、体が震えるぐらいに吸い込まれていきました。それから、その先生をつかまえては、ピアノを弾いてほしいとお願いをし、また、自分でも弾いてみたくなって少しずつ練習をしていき、自分の好きな曲が弾けるようになっていきました。それから毎日のように病院で練習をしていると、子どもたちがたくさん集まってきて、私に大きな拍手をしてくれました。いつの間にか、私の寂しく落ち込んだ心も、「いつかピアニストになって、みんなに喜んでもらおう」という気持ちにまで変わっていきました。もし、この病院で病気を持った子どもたちやピアノに出会っていなければ、あの時の私の悲しく曲がった心はどうなっていたら、どんな人間になっていたら、といつも怖くなります。この病院で勉強したこと、感じたことをこれからも大切にしていきたいなと思っています。

病院での2年間の生活の後、中学校2年から宇久島に帰れることになりました。ようやく両親のもとに帰れる喜びと同時に、私には大きな心配がありました。当時私は、この病気を治すために首から足の付け根のところまである鉄の重いコルセットをつけていました。これを入浴の時以外、一日中つけていましたが、これをつけているときは、落ちている物も拾いにくく、外にいるときに雷が鳴ったりすると、「自分に落ちてくるのではないか」とすぐに隠れたり、かなり不自由な生活でした。そして、ロボットのような自分の姿が周りの人には不思議に奇妙に見えていたのだらうと思いますが、佐世保に行って四ヶ町の町を歩いていても、みんな振り返って私のことを



見ていましたので、人の視線、人の目というものがものすごく気になっていました。そして、学校に行くと、「ロボットみたい」「汚いから近寄るな」「犬の首輪」などと言われ、私が給食当番の時、「私が運んだものはすべて汚い。病気がうつる」と言って、食べ物を捨てていた人もいました。私は学校から早く逃げ出したい一心で、トイレに駆け込み、自分で頭を強く叩いたり振ったりして、「具合が悪い」と毎日のように学校から逃げ続けました。

しかし、このつらい毎日の中で、ただ一人だけ周りを気にしないで私に声をかけ続けてくれた一級下の女の子がいました。彼女はいつも「マコちゃん、元気？」と大きな声をかけ続けてくれ、この女の子が学校にいるというだけで、当時の私の大きな支えになっていました。また、私の両親も、どうしたら私が元気になってくれるか、また学校に行ってくれるかと悩み、児童相談所に何度も電話をしていたそうですが、そこの職員の方の答えとして「つらいことを忘れてしまうほど好きなこと、熱中できることは何ですか？」という意見をいただいたそうです。私はピアノに

出会ってまだ間もない頃でしたが、親子3人で「音楽に賭けてみよう。ピアノで頑張ってみよう」と歩き始めました。まず、ピアノの先生を探すことから始めましたが、両親はまだ会ったこともない宇久高校の音楽の先生の家を訪ね、生徒にしてもらえるようお願いに行きましたが、その先生から「ピアノのプロに道に進むにはもう遅すぎます」と、きっぱりと断られました。それでも何度も何度もお願いに行くと、最後はどうしても習いたいという私たち家族の強い思いが先生に伝わり、ピアノのレッスンをしてもらえることになりました。

習い始めると、この先生はピアノ以外にも私を魚釣りや佐世保などであるコンサートに連れて行ってくれたり、一緒に食事をしたりと、私とふれあう時間をたくさん作ってくれました。あるレッスンの日、台風が来て外を歩けるような状態ではありませんでしたので、「今日のレッスンは休みになるだろう」と思っていました。その嵐の中をバイクで濡れになって私の家までレッスンに来てくれた先生の姿を見た時、私は「自分のためにここまで一生懸命になってくれる人がいる」と思うと、嬉しくて嬉しくて胸がいっぱいになりました。しかし、この先生のレッスンはとても怖くて、私が練習していない時は、棒で頭を何十回も叩かれたり、楽譜が飛ばされたりしていました。そうした厳しいレッスンにくじけそうになった時、私の母から「そんなに厳しくされてるのは、お前のことを思って叱ってくれているんだよ」といつも言われていました。

こんな毎日の中で、この高校のピアノの先生から「中学校の文化祭でピアノを弾いてみたらどうか」と勧められました。私の両親は、「私がこの文化祭でピアノを弾くことで自信をつけてくれれば、学校に行くのではないかと、すぐ校長先生のところをお願いに行きました。「文化祭は元々クラス全員で作っていくような行事ですので、私がたった1人だけで演奏するのは難しい」ということでしたが、学校の先生方も私に何とか自信をつけさせたいということで、文化祭での演奏が実現しました。この時に弾いた曲はベートーベンの「テンペスト」で、とても難しい曲でした。習い始めてたった3ヶ月の私にはとても大変なことで、時には投げ出したいこともありましたが、鍵盤に血が付くほど練習して、本番では大成功に終わり、私にとって大きな自信になりました。

今、私は「人の生き方はたった二つしかない」と思っています。一つは、何か大きな壁にぶつかった時に、すぐ何かの（誰かの）せいにして投げ出す「あきらめる人生」。もう一つは、「絶対できるんだ」と自分を信じて努力していける「あきらめない人生」。この2つのどちらかを私たちは常に選んで生きているわけですが、私も「中学校の文化祭で自分が弾く曲がとても難しいから」、「文化祭に出ることが大変だから」と言って、あきらめなくて本当によかったと思っています。

この文化祭で自信をつけた私は、大分県にある音楽の高校（県立高校の音楽科）に進むことを決めました。受験科目はピアノの演奏と5教科の筆記試験で、合格するのがとても難しい高校でした。私は先生と一緒に一生懸命頑張りましたが、病気を治すために勉強が遅れていましたので、ピアノの演奏では合格しましたが、学科で落ちてしまいました。その後、受験先の高校の先生から、音楽（ピアノ）の道をあきらめることをすすめるような手紙が届き、この時、私は「もうこれでピアノをやめなければならないんだ」「ピアニストにはなれないんだ」と思い、目の前が真っ

暗になりました。しかし、そんな私を母が「この大分の先生の手紙は、お前の本当の気持ちを、ピアノが本当に好きかどうかを確かめているんだと思うよ。この手紙を見て、あきらめてピアノ以外の別の道を探すか、それとも“なにくそ”と思って、もう一度再挑戦していくか、どちらを選ぶか、大分の先生は待っていると思うよ」と励ましてくれました。この一言で私はもう一回頑張ることを決めました。今振り返ってみると、母は私と一緒にこの手紙を見たのに落ち込まないで、その手紙の内容を私に前向きに考えさせました。今、この時のことをとても感謝しています。

それから1年間、私は家で勉強を続けることになりました。その頃の宇久島には、まだ塾がありませんでしたので、勉強がわからない時は学校に聞きに行ったり、中学校の先生方が私の家まで来てくれて勉強を見てくれたり、たくさんの人に支えられて、次の年ようやく大分の学校に入学することができました。諫早の病院の前で泣いた時からこれまで、人よりも友だちよりも随分遠回りをしてきたようですが、このつらかった時間こそが大切なんだと気づいていく勉強だったと思っています。

最後にもう一つだけ聞いてください。私は今多くの学校で講演をさせていただいておりますが、その中で、皆さんから質問を受けることがあります。それは、「自分の夢を見つけるためにはどうしたらいいですか?」ということです。ここにいる皆さんも一度は同じようなことを思ったことがあると思いますが、私はこんな風に考えています。私の友人に目の不自由な、物を全く見ることができないおばちゃんがありますが、彼女は植物や花を育てるのが好きで、毎日のように植物や花に話しかけるんだと聞きます。「目が不自由なのに、真っ暗な世界なのに、どうして花がきれいだなと感じることができるんだろう」と、私は不思議に思っていました。それはおそらく花に話しかけるといこと、つまり、相手の心に寄り添うということ、そうした優しい、きれいな心であるからこそ、美しい花を感じることができるのだと思いました。皆さんも自分以外のお友達や両親、先生方の気持ちも時には考えてみてください。例えば、「今日、自分の友だちがとても嬉しそうにしているけれども、何かいいことがあったんだろうか?」、「朝、起きてみると、お母さんがとても悲しそうにしている。体の具合でも悪いのかなあ?」といったような、自分以外の相手のことを思うことができるということ。この優しい気持ちの中だからこそ、「将来こんな仕事をし、人の役に立ちたい。そのためには、今からこんな勉強をしていかなければならない。」というような自分の夢や希望に必ずつながっていくと思います。まずは、優しい気持ちになれることから挑戦してほしいと思います。

これからは、ここにいらっしゃる皆さんがそれぞれの道を健康で元気に歩いていけるように、私もしっかり祈っていたいと思います。どうもありがとうございました。

ピアノ演奏（曲目）

1. ショパン作曲「ノクターン第2番 変ホ長調」
2. 森山直太郎作曲「さくら」
3. ナイジェル・ヘス作曲「ヴァイオリンと管弦楽の為のファンタジー」
4. 平井堅作曲「美しい人」
5. 中村八大作曲「上を向いて歩こう」
6. プッチーニ作曲「オペラ“トゥーランドット”より
ネッスン・ドルマ（寝てはならぬ）」



（3年生女子）